

## マレーシア日本国際工科院 (MJIT) に赴任して

原 啓文



マレーシア日本国際工科院 (Malaysia-Japan International Institute of Technology ; MJIT, <http://mjiit.utm.my>) に赴任して1年半が経った。MJITはマレーシア工科大学 (Universiti Teknologi Malaysia ; UTM) の下に日本型の工学教育を導入するために、日本・マレーシア首脳間の合意を踏まえて設立された学術機関で、2011年9月にマレーシアの首都・クアラルンプールに開校した。日本側からは、外務省、文部科学省、経済産業省、日本商工会議所および国際協力機構 (JICA)、および25校の日本国内の協力大学から成るコンソーシアム (JUC) を形成し、カリキュラムの策定や日本人教員派遣などで協力関係を構築している。

マレーシア政府は、2020年国家発展構想 (ビジョン2020) において2020年までに先進国入りすることを目指しており、特に高等教育を充実させ、産業のニーズに合致した高度な知識を有した人材の供給拡大を行う方針のもと、MJITを整備し日本型工学教育による技術知識や労働倫理の習得によって高い生産性と競争力を有する人材育成を目指している。マレーシア国内において、MJITは日本とマレーシアとの間の人的交流促進に寄与することはもとより、日本式工学教育を受けた優秀な人材を育成する場として、ASEANの工学教育のハブとなり、アジアをリードする高等教育機関に発展していくことが期待されている。MJITには学部プログラムとして機械精密工学科、電子システム工学科、環境・グリーン技術工学科、技術経営学科の4学科の他、修士・博士の研究型プログラムが提供され、2014年現在約600名の学生がマレーシア現地教員、イギリスをはじめとした他国出身の教員、日本からの派遣教員のもと勉学に励んでいる。私が在籍している環境・グリーン技術工学科は、教員数16名のうちマレーシア現地教員が7名、日本からの派遣教員が4名、その他インドネシア、エジプト、ギリシャなどから5名と他の学科と比べて国際色が非常に強い学科である。

マレーシアは、近年の経済発展のおかげで特にクアラルンプール周辺では日本と遜色ない生活もでき、交通渋滞以外は非常に快適である。一方、経済発展を優先してきた経緯から、マレーシア各地で環境汚染が問題となっている。特に都市部においてはパーム油プランテーションを発端とするヘイズ (煙害)、急速な人口増に対応が追いつかない上下水道の整備と水環境の悪化、産業廃棄物などの固形廃棄物の効率的な処理などが問題である。マレーシアにおいて日本が得意とする環境工学的な技術が今後必要な技術となることは想像に難くない。現在は、これらの問題を解決する技術および将来的な人材を排出することを目的として、研究・教育活動に励んでいる。

と建前はさておき、マレーシアとMJITの現状について述べたい。マレーシアはマレー系を中心としたイスラム教国であるが、中華系およびインド系が3割強を占める多民族国家である。7月現在マレー系はラマダン (断食) 期間であるが、イスラム系以外は食事することもできるため、生活に支障はない。また中華系が多いため日本人の口にあった食事もありお酒も自由に飲むことができ、イスラムの戒律が厳しい他国よりも十分に住みやすいのではと感じている。

一方、研究環境はまだ問題点が多い。機材や消耗品の納入に関しては、よく言えばノンビリしているのが特徴で、日本では2~3日程度で納入できそうな消耗品は2~3週間以上かかるのが一般的である。また、機材の選定に関しても同様に多くの時間を要することから、研究環境を整えて実際に研究を始めるのに1年以上は費やさざるを得ないのが現状である。また、MJITでは学部教育と大学院教育 (研究指向型) を同時に開始したため、現状では大学院生の確保は他大学から募集することが前提となっている。MJITの所属するマレーシア工科大学はマレーシア国内の研究重点5大学の一つであり、マレー人優遇政策 (ブミプトラ政策) のおかげでマレー系に対する奨学金制度が充実しており、現在は多くのマレー系学生を確保し研究を進めている。研究活動の更なる推進のためJUC加盟大学の一つである筑波大学環境科学研究科に4名の学生を6か月間派遣し、共同指導体制を取りながら研究の活性化を進めるとともに、今後さらに多くの学生を、筑波大学をはじめとしたJUC加盟大学に共同指導というかたちで派遣することを計画している。将来、共同研究を柱としたJUCとの関係を密に取りながらMJITにおける研究活動の活性化を進めていければと考えている。

2014年7月現在MJITにはJUC加盟大学から18名の日本人教員が派遣されているが、30~40代の若手教員は私一人である。MJITが将来東南アジアのハブとなるような教育・研究機関として発展していくためには、より多くの若手教員がMJITで教鞭をとりながら研究活動を活性化していくことが不可欠であろう。今後、研究環境をしっかりと揃え優秀な学生の確保を進めるとともに、日本の若手教員のステップアップの一つとしてMJITへ赴任できるような体制作りも重要であると考えている。また、マレーシア特有の熱帯環境を生かした環境保全学、環境微生物学を中心として、日本の大学との共同研究の架け橋となるよう、さらにポストドク先、留学先にMJITが選ばれるよう研究活動を活性化させ、MJITが東南アジアにおける教育・研究のハブとなるようこれからも努力していきたい。